

## P-047

特別支援学校の訪問教育を受ける  
児童生徒の健康診断に対して養護  
教諭が抱く困難

清水 史恵

滋慶医療科学大学大学院

## 【はじめに】

特別支援学校では、体調の不安定さ等により通学が困難な児童生徒に対し、教員を自宅や施設や病院に派遣する訪問教育が行われている。訪問教育を受ける児童生徒（以下、訪問生）への健康診断の実施率は低い。訪問生とは、特別支援学校の訪問籍に在籍し、在宅（家庭）または施設（治療を目的とした病院を除く）において、定期的に特別支援学校の教員より教育を受けている児童生徒とする。

## 【目的】

特別支援学校の訪問教育を受ける児童生徒への健康診断において、養護教諭がどのような困難を感じているのかを明らかにする。

## 【方法】

訪問生が在籍する全国の特別支援学校316校の養護教諭を対象とし、2024年9月～12月に無記名自記式質問紙調査を実施した。一校に複数の養護教諭が勤務する場合は、その学校での養護教諭としての経験年数が最も長い教諭1名を対象とした。養護教諭128名より回答を得た。困難感の有無については単純集計を行い、困難に感じる内容に関する自由記載の回答は質的内容分析を行った。滋慶医療科学大学大学院の研究倫理委員会の承認を得た。

## 【結果】

回答者の養護教諭としての学校での経験は平均15.9年、特別支援学校での経験は平均8.9年であった。訪問生への健康診断において困難に感じるものが「ある」91名（71.1%）、「ない」33名（25.8%）、無回答4名（3.1%）であった。

質的内容分析の結果、6《カテゴリー》、19《サブカテゴリー》が見出された。養護教諭は、《学校定期健康診断日に合わせた登校》《学外での学校定期健康診断の実施》《訪問生にあった健診方法での実施》《未受診の場合の適切な取り扱い》《訪問生の情報収集》を困難に感じていた。また、健康診断により保護者に負担をかける心配、他児との交流を優先させたい保護者の思いの尊重、定期通院しているため保護者が健診の必要性を感じていないことから、養護教諭は《訪問生を対象とした健康診断実施への迷い》を感じていた。

## 【考察】

約7割の養護教諭が訪問生の定期健康診断実施に困難を感じていた。かかりつけ医での定期受診の結果など訪問生の情報共有、定期受診をしていない健診項目については学外でも受診できるシステム構築が望まれる。学校定期健康診断は、児童生徒の健康保持増進にむけた教育活動でもあることから、健診の機会を訪問生の教育活動にどうつなげていくのかを考える必要がある。

本研究は日本学校保健学会の企画研究である。

## P-048

ブラジル人学校の子どもの立位バ  
ランス能力と体組成の関連山崎 彩<sup>1)</sup>、小原 成美<sup>1)</sup>、李 孟蓉<sup>1)</sup>、  
長井 祐子<sup>2)</sup>、竹内 真理<sup>2)</sup>、青柳 千春<sup>3)</sup>、  
長峰 竹明<sup>4)</sup>、正木 光裕<sup>1)</sup><sup>1)</sup>高崎健康福祉大学 保健医療学部、<sup>2)</sup>高崎健康福祉大学 健康福祉学部、<sup>3)</sup>東京家政大学 人文学部、<sup>4)</sup>博仁会 第一病院 内科

【研究背景および目的】 地域貢献事業としてブラジル人学校を対象とした健康診断を実施した。本研究ではブラジル人学校の子どもにおける立位バランス能力と体組成との関連を検討した。【方法】 対象はブラジル人学校の小・中学生男子33名（年齢 $10.6 \pm 2.6$ 歳）、女子36名（年齢 $11.7 \pm 2.7$ 歳）とした。立位バランス能力については重心動揺計を使用し、両脚・片脚（右脚）立位での重心動揺（総軌跡長、単位軌跡長、単位面積軌跡長、矩形面積、外周面積、実効値、実効値面積）を開眼にて各1回測定した。体組成については体成分分析装置（InBody470）を使用し、両脚立位にて左右脚筋肉量、全身の体脂肪量を1回測定した。男子、女子それぞれの立位バランス能力と関連する要因を検討するために、両脚・片脚立位での重心動揺の各項目を従属変数、体組成、年齢を独立変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。両脚立位での重心動揺との関連には左右脚筋肉量の平均値、片脚立位での重心動揺との関連には右脚筋肉量を用いた。本研究は高崎健康福祉大学研究倫理委員会の承認を得て実施し、対象者、保護者から書面にて同意を得た。【結果】 男子の両脚立位での総軌跡長、単位軌跡長の減少には脚筋肉量の増加、矩形面積、外周面積、実効値、実効値面積の減少には年齢の増加が有意に関連した。男子の片脚立位での総軌跡長、単位軌跡長、矩形面積、外周面積、実効値、実効値面積の減少には脚筋肉量の増加が有意に関連した。女子の両脚立位での実効値面積の減少には脚筋肉量の増加、総軌跡長、単位軌跡長、単位面積軌跡長、矩形面積、外周面積、実効値の減少には年齢の増加が有意に関連した。女子の片脚立位での総軌跡長、単位軌跡長、外周面積、実効値、実効値面積の減少には年齢の増加が有意に関連した。【考察】 本研究の結果より、男子において体脂肪量よりも脚筋肉量の増加が立位バランス能力の向上に重要であると考えられた。女子においても体脂肪量よりも脚筋肉量の増加が立位バランス能力の向上に寄与していると考えられた。しかし、女子においては脚筋肉量と有意に関連した重心動揺の項目は両脚立位での実効値面積のみであったため、立位バランス能力の向上には脚筋肉量のみならず下肢筋の協調性といったその他の要因が重要となっている可能性がある。また、男子、女子において年齢の増加とともに立位バランス能力が向上することが示唆された。